

本校ニ於テ蒐集貯藏セル美術上ノ参考標本ヲ平時常ニ陳列展覽セシメテ生徒ノ教養ニ資セシムルノミナラズ延イテ校外篤志者ニモ參觀ヲ許シ美術工藝界ヲ裨益スルノ目的ヲ以テ本校ニ陳列館新築ノ必要アルハ前數年間ノ年報ニ於テ縷説スル所ニシテ其論旨既に盡セルヲ以テ今復タ絮言セザルモ其必要ヲ感ズルコト年一年益々切ナルモノアリ 因テ此事ノ單ニ一片ノ意見希望タルノ域ヲ脱シ速ニ實行セラル、ニ至ランコトヲ望ム

〔大正六年度年報における「製版科教室新築ノ件」〕「写真科本設置ノ件」の項目は本年報においては削除されている。このうち前者に關しては本年報乙款「其他經濟上特ニ申報スヘキ事項」に第一の項目として

「一 本校ニ從來製版科ナカリシモ大正三年九月ヨリ新設セラレ之ニ要スル教室ノ設備ナキヲ以テ假リニ鑄造科ノ一部及化學教室ノ一部ヲ充當シ漸々不便ヲ忍ヒツ、今日ニ至リシモ生徒及學級ノ増加ニ伴ヒ教授上ノ支障少カラス 依テ製版科教室ヲ新築セラレンコトヲ切望ス 且又製版科新設ニ伴フ豫算ノ増額僅少ナリシ為メ經理上非常ノ困難ヲ來シ居レリ 依テ之カ經費ノ増額ヲモ併セテ切望ス」という記載がなされているが、後者については何ら記されていない。」

雜件  
生徒實驗ノ資ニ供スルタメ諸所ノ依囑ヲ受ケ製作ニ從事シタルモノ、中重モナルモノヲ擧グレバ左ノ如シ

依囑製作一覽

品名	數量	受託年度	本年度内竣工未竣工	依囑者
鳳凰噴水塔	壹基	前年度	竣工	藤田敏郎
姿見	貳基	本年度	同	宮内省
御飾時計	壹個	前年度	未竣工	東京市
小野光景銅像	壹基	本年度	同	小澤明治
山形仲藝銅像	壹基	同	同	井上嘉都治

『東京美術学校校友会月報』記事抜粹

東京美術学校近事 (二六—七) 卷号 T・七・一・三 年月日

●辭令

前田祥吾  
雇を命ず、圖案科第二部助手を命ず

雇 安藤喜八郎

依願解雇 (以上一月三十日)

囑託 畑正吉

任東京美術学校助教 (一月三十一日)

●職員動靜

○澤村專太郎氏 (囑託) 十二月一日無事孟買<sup>[ボンベイ]</sup>に到着、目下諸般の準備中なれば、近日アジャンターに向ひ出發すべしと、十二月五日同氏の發信に見えたり。

●辭令

紋從五位

正六位勲六等 結城 林 藏

從六位勲六等 沼田 勇次郎

從 六 位 小堀 軻 音

從六位勲六等 藤島 武 二

從 六 位 川合 芳三郎

紋正六位

正 七 位 神木 健 介

紋從六位（以上二月十二日）

囑託工學博士 關野 貞

依願解囑

工學博士 關野 貞

支那印度留學中東洋建築史資料蒐集を囑託す（以上二月十四日）

●卒業式日變更 本校卒業式は從來三月廿九日午後舉行のこととなり居りたるが、本年より例年三月二十四日午前十時より行ふこと但し當日日曜日に當る時は翌日に繰下ぐることに改めたり、即ち本年は三月二十五日（月曜）午前十時より舉行の筈なり。

●本校生徒宮城拜觀 本校圖書師範科生徒十七名本科生徒中教員志望者十五名は宮城拜觀を差許され二月二十二日午前白濱〔徴〕島田〔佳矣〕兩教授中澤〔治之助〕書記附添にて拜觀せり。

●職員動靜

○關野貞氏 二月二十日出發海外留學の途に上らる。朝鮮を経て支那に至り半年計り滯留研究の後印度に渡り、こゝにも半年計り巡歴の上英佛伊へ向はるべしと。

○辻村延太郎氏 今回電話架設せらる。番號は小石川二八〇三なり。

○大村西崖氏 一月二十九日靜岡縣在住の御實母逝去せらる。

○赤間運藏氏 二月六日令閨逝去せらる。

○千頭庸哉氏 二月十六日御實母逝去せらる。

○寺崎廣業氏 二月十八日令息廣民氏（二男）を喪はる。

○堀井政吉氏 二月十八日御實母逝去せらる。近來の如く職員の家族又は卒業生生徒間に不幸の續くは前例なきことにて洵に痛悼に堪えざる所なり。

東京美術學校近事〔一六一九。T・七・六・三〇〕

●辭令

任東京美術學校教授 平田 宗 幸

紋高等官六等（三月十四日）

米村 健 一

本校製版科製圖授業を本學年中囑託す（四月八日）

紋正四位（四月十日） 從四位勲三等 小島 憲 之

●卒業式 本校第二十七回卒業證書授與式は、三月二十五日午前十

時より講堂に於て行はる、正木〔直彦〕校長式辭を述べ、卒業生百〇九人に卒業證書を授與し、次で卒業生に對し告辭あり、次に文部省督學官丸山環氏壇上に登りて岡田〔良平〕文部大臣の訓辭を朗讀せられ、卒業生總代加納川郁之助の答辭ありて式を終る、尙例年の通り卒業製作を別室に陳列し當日は來賓諸氏に翌日は生徒父兄其他關係者の觀覽に供したり。卒業生姓名卒業製作目錄、文部大臣訓辭、卒業生答辭等左の如し。

卒業生姓名及卒業製作目錄

日本畫科

春	本科	星川清雄	山形士
魏の節乳母	同	岩田正巳	新潟平
莢竹桃	同	關澄正巳	東京平
雨月物語	同	井上豊治郎	東京平
花	同	宮内龍子	千葉平
羅浮仙	同	松浦孝忠	富山平
梅妃	同	湯川直春	大阪平
夏と冬	同	麻田寛嶺	新潟平
若葉の蔭	同	山崎善次郎	佐賀士
收穫	同	矢部友衛	新潟士
道成寺	同	三宅一朗	愛知平
樞紅葉	同	浦志武雄	福岡平
春さき	同	山本茂磨	長野平
花見車	同	吉田毅	大分平
護摩	同	山田安士	山形士

孔雀	同	關戸三郎右衛門	石川平
秋	同	穂積正雄	福島平
あけぼのゝ光	同	北原大輔	長野平
玉の井	同	泰法成	大阪平
落葉	同	森茂雄	福岡士

西洋畫科

自畫肖像、水	本科	加納川郁之助	大阪平
同、兵器廠の歸り	同	細井文次郎	愛知平
同、畫室ノ中	同	佃武昭	岡山平
同、春	同	淵弘三	佐賀士
同、歸路	同	玉井正之助	愛媛平
同、女	同	高梨辰	神奈川平
同、モデル休みのひま	同	加藤廣	埼玉平
同、女	同	小泉素彦	東京士
同、女	同	小野信治郎	滋賀平
同、金剛秋意	同	遠田運雄	石川平
同、女	同	鱸利彦	千葉平
同、櫛	同	谷口午二	鹿兒島士
同、思念	同	龜井實	東京士
同、異境の地	同	田代眞	熊本士
同、土耳古室の山田寅次氏	同	黒田新	大阪平
同、ほかげ	同	河越虎之進	長野平
同、髪	同	秋草彌三郎	鳥取平
同、小春日和	同	外山左傳	熊本平

同、暮	同	河上大二	山口士
同、トラツクの港	同	大塚辰夫	東京平
同、彼女等	同	三栖敏雄	和歌山平
同、鏡	同	山本治兵衛	埼玉平
同、化粧	同	赤松彦次郎	東京平
同、お茶湯日の夜	同	吉田健夫	東京士
同、窓近く	同	坂東親次	兵庫士
同、	同	小栗清造	愛知平
同、	同	飯森定省	石川士
同、	同	池ノ内三郎	埼玉平
同、	同	齋藤赤心	福岡士
同、	同	鮫島利久	東京士
同、	同	藤田雅夫	宮崎士
同、	同	笹森清一郎	青森士
同、	同	鹿兒島彦次郎	福岡平
同、春	選科	李廷英	支那
同、夕	同	劉鏡源	支那
彫刻科			
塑造部			
佐保姫	本科	日名子實藏	大分平
エチユード	同	濱田三郎	神奈川平
鐵工	同	宮川準一	石川士
無題	同	寺畑助之丞	富山平
女	同	岩越二郎	熊本士

木彫部			
森のエピソード	本科	林良三	東京平
夏雲	同	奥原謙太郎	東京士
春の香	選科	石田午郎	大分平
牙彫部			
人の歩む三ツの道	選科	勝海俊雄	静岡平
圖案科			
第一部			
窓掛壁張及絨氈圖案	本科	杉本盛二郎	石川士
三美應用屏風圖案	同	阿部摺英	石川士
各種工藝花瓶圖案	同	改井德憲	富山平
置時計及椅子蒲團圖案	同	加藤善治	秋田平
刺繡應用衝立圖案	同	小澤蘇來	群馬平
第二部			
ホテル建築設計圖案	本科	大石 <sup>(能)</sup> 靖	富山平
劇場建築設計圖案	同	矢 <sup>(能)</sup> 雖 <sup>(能)</sup> 金太郎	静岡平
金工科			
蓮池圖手箱	本科	高梨靜治	新潟平
六角形菓子器	同	岩田藤七	東京平
海老圖花瓶	選科	小林親光	東京平
水邊松圖花瓶	同	關省三郎	富山平
飾壺	同	松本春次郎	香川平
三笑圖額面	本科	藤原一郎	東京平
鑄造科			

香樓

漆工科

扇面形夕の森圖、流水  
圖重色紙形小督の意

扇面形山水圖、  
色紙形行幸の意

扇面形鳳凰圖、  
色紙形牡丹圖

重扇面形水仙圖、  
色紙形秋草圖流水圖

以上表裏合作<sup>(衡)</sup>立

製版科

臨時寫真科

ミス・エム

浴せんとする女

讀書

ひとつ思を辿りて

奏曲の前

惱み

圖畫師範科

麻生秀二 東京士

宮本幸恵 鳥取平

小山知弘 富山平

藤田薫 奈良士

本科 村井勝藏 山口市

本科 加藤 眞 福井平

同 竹村 猛 三重平

同 三好政次 宮崎平

同 田口敬次郎 秋田平

本科 戸塚暢夫 東京平

同 澁谷孝次 栃木士

同 波々伯部 方次 福井士

本科 中山岩太 福岡士

同 成田隆吉 愛媛士

同 末岡利亮 山口平

同 山本達雄 東京平

同 内田兵馬 埼玉平

同 宇高久敬 愛媛平

路川健介 茨城平

坪田繁 福井平

松田忠一 島根平

渡邊武久 福島平

志賀寛治 福岡平

石野隆 神奈川士

澁江龍雄 鹿児島士

卒業生科別人員

科目 本科

日本畫科 二〇

西洋畫科 三三

彫刻科 五

木彫部 二

牙彫部 〇

圖案科 第一二部 五

金工科 二

鑄造科 一

漆工科 四

製版科 三

臨時寫真科 六

圖畫師範科 一八

合計 一〇一

佃 靄雄 鳥取平

吉澤和義 長野平

勝間田武夫 静岡平

高橋重己 青森平

鈴木勝 長野士

林 憲亮 奈良士

大竹善次郎 福島平

選科 計

二〇

三五

五

一三

一

五

二

六

一

四

三

六

一八

一〇九

文部大臣祝辭

美術の世道人心に關するや大なり 豈啻に昭代文明の華たるのみならずや 東京美術學校卒業生諸子今や課程を本校に卒へ其の履修せる所を提けて將に世に立たんとす 諸子冀はくは其の抱負を大にし其の用意を密にし一生を研究に終へて悔いさりし古名家の心を心として業に従ひ又常に品性の向上を怠らずして根抵の培養に力め以て將來に大成せんことを期せよ 若し夫れ教育の任に當るものは恪勤職を奉じ悃誠徒を導き獨り技藝の師たるのみならず人格徳操に於ても亦衆生に範たらんことを勗めよ 之を祝辭とす

大正七年三月二十五日

文部大臣 岡 田 良 平

卒業生答辭

生等本校に入學せしより茲に幾星霜 正木學校長並に諸先生の懇篤なる指導を蒙り其薰化に浴し幸に規程の科目を履修し其業の卒ふるを得たり、乃ち本日をして第二十七回卒業式の盛典を舉行せらる 而して文部大臣閣下の貴臨を辱ふし且親しく訓諭を垂れて生徒を祝福し希望を前途に囑せらる 生等の光榮身に餘り偏に感激の至りに堪へず

傍に思ふに美術は一國文明の精華也 能く社會の人情風俗をして高尚優美ならしむ 然り而して其精華を發揚し人情風俗を美化せしむるの作品を出すは實に美術家の任務たり 生等本校に於て修むる所則ち美術に資する學問と技能とに在り 將來自ら期する所亦美術家たるに在り 顧みて其任務甚だ重く或は負荷に堪えざるを畏る 今や本校の業を卒ふと雖も決して此小成に安することなく益々獨自修養鍊磨研鑽の工夫を積み社會に處して美術家たるの任務を空ふせざるに努力すべき而已

若し夫れ出て教育の任に従事する者は善く本校教養の趣旨を體し熱心忠實其職務に盡瘁する所あらんとす 聊か蕪言を陳じて學校長並に諸先生

の深恩を謝し大臣閣下の高諭に奉答す

大正七年三月二十五日

東京美術學校卒業生總代 加納川 郁之助

●新入學生 本年度新入學生として入學を許可せられたる者左の如し

豫備科

日本畫科

永井 武雄	東京士	荒井 鋼一郎	山形平
森田 才一	愛知平	水野 穰	兵庫士
池之上 愿	鹿兒島平	桃崎 俊一	福岡士
白井 壯太郎	東京平	古川 龍夫	栃木平
今泉 秀美	佐賀平	日向 三郎	茨城平
上野 占己地	山梨平	野口 謙次郎	佐賀 <sup>[賀]</sup> 平
國則 薰	高知平	福井 明	長崎平
入江 威	東京平	古 莊 健意地郎	熊本平
丹羽 福藏	兵庫平	秀島 英麿	佐賀士
村島 酉一郎	富山士	内ヶ崎 敏雄	宮城平
堀 脩三	石川平	遠山 伊藏	奈良士
松村 茂雄	長野平	宮澤 鐵次郎	長野平
金原 輝雄	東京平	小島 三好	新潟平
西洋畫科			
進藤 常雄	山口士	濱田 重雄	鳥取平
吉田 四郎	東京士	田代 謙助	福岡平

相島 宏 埼玉平	鈴木 大造 和歌山平	松崎 秀次 埼玉平	小林 太六 愛知平	佐々木 慶太郎 滋賀平	和田 茂生 大分士	今井 千尋 和歌山平	中村 一郎 栃木平	小野 安治 岡山平	藤 彦衛 岡山平	佐藤 九二男 北海平	中島 親史 兵庫平	深澤 省三 巖手平	片野 武男 東京平	御園生 義太 山口平	石川 吉次郎 山形平	川島 昌介 <small>昌介</small> 栃木平	彫刻科	齋藤 又乙 千葉士	門脇 正夫 東京平	矢野 判三 岐阜平	荒居 徳亮 栃木平
首藤 讓 大分平	佐伯 祐三 大阪平	杉山 新樹 愛知平	山田 新一 宮崎士	田中 成一 東京平	鹽田 信夫 群馬平	西内 清顯 高知士	江藤 純平 大分平	栗田 博 東京平	二瓶 徳松 北海平	金子 梅吉 福岡平	山田 忠郎 北海平	坂入 潔 茨城平	伊藤 薫朔 東京平	楠目 成照 高知士	川合 修二 東京平	岩田 藤七 東京平	塑造部	今村 重三郎 大阪平	中川 清 滋賀平	小林 金央 埼玉平	三上 新太郎 埼玉平

竹田 與作 富山平	橋本 彌三郎 香川平	圖案科	大橋 寔 京都平	森田 政雄 長崎平	中山 修三 富山平	石崎 猛夫 茨城平	柿田 秀雄 石川士	江本 邦三 愛知平	田代 忠 熊本士	金工科	川田 直一 香川平	高澤 與吉 千葉平	水谷 育太郎 東京平	鑄造科	林 万尋人 廣島士	齋江 榮 鳥取平	佐原 亮太郎 東京平	漆工科	福村 善久 石川平	岩永 正男 長崎平
木内 五郎 東京平		第一部	森 正 石川平	城所 徳雄 東京平	橋 大含 石川平	熊谷 年郎 静岡士	加曾利 鼎造 千葉士	小林 吉一 東京士		杉浦 基史郎 愛知平	水町 程之 東京士	横山 正義 香川平	君塚 猛男 千葉平	金子 和助 巖手平	森村 酉三 群馬平	伊達 春郎 宮城士	駒見 篤太郎 富山平			

木彫部

製版科

大江恒吉 東京士  
 宇野先太郎 滋賀士  
 持永家貞 長崎平  
 須田孝之 富山平

臨時寫真科

第一年級

内野國次郎 山口平  
 樋口重親 福岡平  
 松村芳男 東京平  
 市川正人 愛知士  
 若林實雄 大阪平  
 有賀質 東京平

圖畫師範科

第一年級

三浦直政 大分平  
 松崎卯市 福岡平  
 神津義治 長野平  
 谷山藤四郎 岡山平  
 鎌倉芳太郎 香川平  
 日野義英 廣島平  
 矢吹誠 福島平  
 福田寬 青森平  
 田近利夫 大分士  
 永田元 鹿兒島平  
 飛田昭喬 福島平  
 長谷川源三郎 愛知平  
 一井爲治郎 滋賀平  
 土屋常義 長野平  
 角田耕 山梨平  
 牧田實 埼玉平  
 古谷虎武 和歌山平  
 大東喜一 奈良平  
 星野金之助 埼玉平  
 石橋孟 長崎士  
 上田國馬 高知平  
 藤井清 廣島士

●職員動靜  
 合田清氏 市外澁谷町中澁谷五五へ轉居

野口六三氏 麴町區平河町六丁目十一、辻啓一郎方へ轉居

東京美術學校近事〔一七一—。T・七・七・三〇〕

●辭令

從五位勲六等 結城林藏

敍勲五等授瑞寶章（四月二十二日）

教授 小堀輛音

學術研究の爲朝鮮へ出張を命ず（四月二十三日）

中山岩太

雇を命ず、臨時寫真科助手を命ず（五月八日）

教授 平田宗幸

敍正七位（五月二十日）

囑託 小島憲之

囑託 下田次郎

助教授 小林萬吾

囑託 岡田起作

教員檢定委員會臨時委員被仰付（六月十三日）

教授 黑田清輝

調度寮囑託被免

宮内省御用掛被仰付（六月二十二日）

校長 正木直彦

臨時議院建築局顧問被仰付（七月十八日）

從五位勲六等 寺崎廣業



紋勲五等授瑞寶章

從七位勲七等 長原 孝太郎

紋勲六等授瑞寶章（以上七月二十六日）

●職員動靜

○小堀鞆音氏（教授） 風俗研究の爲め四月二十五日出發朝鮮へ向はれ六月一日歸京せらる。

○鈴川信一氏（囑託） 五月九日母堂逝去せらる、御哀悼に堪へず。

○澤村專太郎氏（囑託） 印度より五月十七日歸朝せらる。

東京美術學校近事（一七一—二。T・七・八・三〇）

●職員動靜

○鎌田彌壽治氏 今回電話を架設せらる。番號は小石川三二二番なり。

○森芳太郎氏 本所區向島中之郷町八八、末正化學工業所内へ轉居。

○白山松哉氏 架設の電話今般廢止さる。

○神木健介氏 麹町區下二番町廿八へ轉居

○屋代鉞三氏 五月三日付を以て學習院弓術講師を囑託せらる。同院にては今學年より正科として、中學科に弓術を課せられ、又漸次課外にも之を獎勵せんとて、此囑託を見るに至りしなりといふ。

○福井江亭氏 休職中なる同氏は、目下滿洲大連市攝津町高野山大師教會内にありて盛んに揮毫し居らるゝと。

○岡田秋嶺氏 此程電話開通、番號は番町四二九六なり。

東京美術學校近事（一七一—三。T・七・九・一八）

●辭令

囑託 小島 憲之

敍從三位

特旨を以て位一級被進

敍勲二等授瑞寶章（八月十九日）

書記 屋代 鉞三

敍從七位（八月二十日）

校長 正木 直彦

教授 高村 光雲

同 岡田 三郎助

同 海野 美盛

同 白山 福松

同 島田 佳矣

第六回工藝展覽會審査委員を囑託す（九月三日農商務省）

●師範科修學旅行 圖書師範科第三年生は羽根〔義三〕助教の指導にて十月四日夜出發、三重奈良大阪京都の各府縣へ十日間の豫定にて修學旅行し諸學校を參觀すべし。

●教室近事 西洋畫科に於て從來の制度を替へ、第一年第二年は長原〔孝太郎〕教授小林〔万吾〕助教擔任、第三年第四年を岡田〔三郎助〕教授、和田〔英作〕教授 藤島〔武二〕教授の三教室に分ち生徒の志望により其一に就て授業を受くることとし、卒業期及

び研究科は黒田「清輝」教授の擔任とするの制とし本年九月の新學期より當分實施することとせり。

●職員動靜

○小林龜五郎氏(民)(製版科助手) 勤務演習の爲め九月一日より十一月三十日まで輜重兵第一大隊へ召集せられ入營せらる。

○平田宗幸氏 永らく病氣中なりしが快癒して出勤せらる。

訃音

小島憲之氏薨去

本校講師第一高等學校教授小島憲之氏は八日(丑)初旬より飛驒地方へ旅行中なりしが、旅行先に於て胃痙攣を起し十五日遂に薨去せらる、病危篤の趣上聞に達するや位勲陸紋の御沙汰ありたり、同月二十二日谷中齋場に於て葬儀を執行せらる、本校々長の弔詞左の如し。

(先生の略歴等は次號に記すべし)



小島憲之

弔辭

東京美術學校講師小島憲之君病を以て俄然館舎を捐つ 嗚呼哀哉 明治二十二年我東京美術學校の授業を開始するや君を請ふて講師を囑託す 爾來連綿以て今日に及べり 君の人と爲り温雅篤厚 風格自ら超出し生徒を教ゆること諄

々方あり 皆畏敬悦服せざるは莫し 眞に毓英家の模楷たり 子君と公私相交はること久し 今や遂に幽明相隔つるに遭ふ 洵に哀痛の至に堪へず 抑亦邦家の爲に斯の良教育家を喪ふことを歎惜せずんばあらざる也 茲に謹みて弔辭を靈前に陳ぶ

大正七年八月廿二日

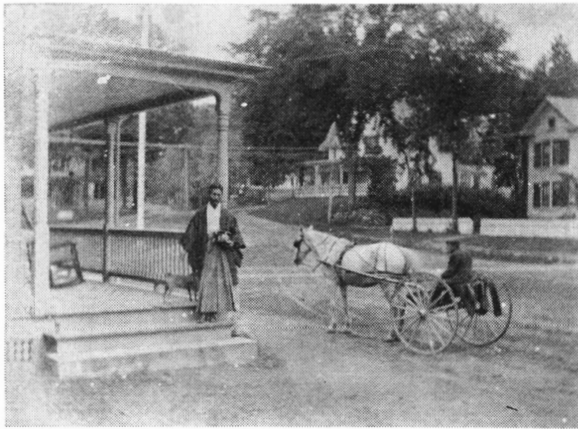
東京美術學校校長 正木直彦

岡部覺彌氏逝去

本校囑託岡部覺彌氏腎臟炎に罹り九月九日午前三時駒込動阪の自邸に逝く、享年四十六、氏は福岡市の生れ、彫金を加納夏雄、海野勝珉兩氏に、彫型を英人ジュロツト氏に、洋畫を吉田嘉三郎氏に、日本畫を川端玉章氏に

滞米中の岡部覺彌

學び其後本校に入りて彫金科を卒へたり 日本美術院の創立に盡し同院が引受けたる國寶修繕事業中彫金の修繕は皆氏が爲せるなり、巴里大博覽會にて銅牌、第五回内國勸業博覽會に名譽賞牌を受け明治三十六年米國に赴きボストン市立美術學校に入りて彫型を學び、(ボ)ボストン博物館技師に聘せらるゝと同時に紐育メトロポリタン美術博物館日本部主任となり其間刀の



鏗に關する研究を發表、名を揚げたり、明治四十一年七月歸朝、昨大正六年十月本校金工科彫金史の授業を囑託せられ、未だ講義を開始するに及ばずして逝かる、悲しい哉

弔辭

爲すあるの才を抱いて天之年を假さず中道にして沮喪する者世孰れこれを悲まざらむ 岡部覺彌君の如きは殊に然り 明治二十二年我が東京美術學校の創立せらるゝや君率先入學し諸生の未だ金工の何たるを解せざるに方り志を定めて其科を修め加納夏雄海野勝珉二家に親炙して技術の蘊奥を究め業成るの後暫く職を學校教官に奉じ各種合金の色澤を應用して能く山水の圖を彫金に作る この種の製作實に君を以て鼻祖と爲す 既にして久しく米國に遊び波士頓の美術館に在りて其藏する所の日本金工品を整理審定し其目錄を作りて添ふるに史傳を以てす 米歐諸國の學者日本の金工を談ずる者皆徵を之に取る 其斯道に貢獻する所尠少に非ざるなり 歸朝の後孜々製作に従事し曩に衆議院よりの大禮紀念獻上品菊慈童を作り更に司法省より同じく奉獻の黄金莊唐大刀を作り其未だ成らざるに方り不幸二豎の侵す所と爲りて終に再び起たず 將に瞑目せんとするに臨み其半成を恨みとすることを言ひて敢て他を語らざ 聞く者巾を濕さざるなし 君人と爲り敦厚溫雅名利に淡く藝術に篤し 其技巧の絶妙は固より贅するを須みず 君を知る者皆其他日聲價の蔚騰せんことを期せり 今や溘焉長逝す 同窓の出身者皆其金工科第一の先輩を喪ひて復この重望を負ふるに足るの人なきを歎せざる者なし 嗚呼悼ましい哉 謹みて弔す

大正七年九月十二日

東京美術學校出身者總代

東京美術學校教授 大村 西 崖

●羽田禎之進氏逝く 元本校教務掛主任羽田禎之進氏は病革り七月二日府下田端五二九の寓に逝去せられし由、氏は慶應三年宮城縣亘理町に生れ、陸軍教導團を経て仙鎮臺及び近衛師團にて軍務に服し、日清日露の兩戰役に從軍し陞りて歩兵中尉に至り從七位勲六等功五級に叙せらる、本校に奉職したるは明治三十年四月にして爾來體操授業擔任教務掛主任たり、大正四年十二月辭職せらる。

東京美術學校近事「二七—四。T・七・十一・三〇」

●辭令

教授 鎌田 彌壽治

理科大學講師を囑託す（九月二十日東北帝國大學）

教授 和田 英作

依願西洋畫科理事を免す

助教 小林 萬吾

西洋畫科理事を命す（十月四日）

教授 大村 西崖

同 白濱 徹

同 鹿島 英二

同 囑託 矢野 道也

同 矢代 幸雄

同 下田 次郎

大正七年度師範學校中學校高等女學校教員等講習會講師を囑託す

（十月十日）

依願解雇（十月十九日）

雇 吉本 吉右衛門

書記 増井 兼吉

大正七年度師範學校中學校高等女學校教員等講習會事務取扱を囑託す（十月二十六日）

教授 古宇田 實

綾勲六等授瑞寶章（十月二十八日）

田邊 孝次

美術史研究室助手を命ず（十一月八日）

雇 寒川 澹

依願解雇（十一月九日）

書記 屋代 欽三

弓術指南兼務を命ず（十一月二十二日）

雇 中山 岩太

依願解雇

從七位 小岩 峻

漆工科蒔繪及調漆實習授業を囑託す（以上十一月廿五日）

●選科生入學 九月二十一日左記の者選科生として入學を許可せらる。

日本畫選科一年

佐々木 猛 難波 千尋

西洋畫選科一年

支那夏 伯鳴 支那高 春來  
支那周 天初 支那伍 子奇  
浙江省 廣東省

朝鮮李 鍾禹  
黃海道李 鍾禹

彫刻科木彫部選科一年

竹田 與作 山内 倉藏

吉川 保正

●本校創立記念日 十月四日午前例により本校創立記念式を大講堂に於て舉行せらる。正木〔直彦〕校長の式辭ありたる後、大村〔西崖〕教授の支那の土偶に就て講演ありたり、これ當日別室に於て本校近年の購入品並に之に關連して舊藏支那土偶の陳列をなして卒業生在學生の觀覽に供したるを以てなり。當日陳列せるもの大略左の通りにして爾來引續き文庫階上に於て陳列せり。

勝田竹翁筆神農圖 海北友松筆人物 等禪筆文殊 奈良法眼筆

山水 住吉如慶筆幻夢物語繪卷 住吉繪所傳來如慶具慶下畫

若杉磯八筆鷹狩圖 六朝石佛 唐窯黃綠釉盤 鐵製佛頭 古銅

博山爐 支那土偶數種 關野〔貞〕博士蒐集支那土偶、磚、銅

器ノ類 香取〔秀真〕氏編纂法隆寺西圓堂納鏡圖譜

科外講演

本校東洋繪畫史、東洋美術史の擔任教授たる大村西崖氏は多年研究したる密教に就いて其蘊蓄を傾けて密教發達志五卷の大著を完成出版されしが之を機會に今回密教の美術に關聯せる方面を講演せんことを思ひ立ち正木〔直彦〕校長の賛同を得て本校に於て科外講演として密教美術史を公開的に講演さるゝ由にて校内職員生徒は云ふに及ばず廣く各科卒業生諸氏の來聽を希望せらるゝとのことなり 又本校關係者にあらざる人々にてても隨意來聽差支なしと 聽講希望者は左記の要領を知り置くべし（せ）

一題目は密教美術史

一講演は大正八年一月八日以後に開始し毎週土曜日午後一時より二時間づゝ(約一年間繼續終了の豫定)

一場所は本校第一講義室

一聴講者は本校美術史研究室に申出で聴講券(無料)を受け置かるべし

### ●職員動靜

○鎌田彌壽治氏(教授) 東北帝國大學理科大學講師を囑託せらる。寫眞化學擔任の爲めにして毎月二回仙臺へ出張講義せらるゝ由。

○中山岩太氏(寫眞科助手) 農商務省海外實業練習生に採用せられ紐育に於て寫眞材料製造を研究せらるゝことゝなれり。

○福井江亭氏 最近の短信によれば、林「権助」公使の紹介にて總長各督軍其他の大家を訪問し、祕藏の畫幅を閲覽取調べられつゝあるが、近日南清方面に向はるべしといふ。

### 訃音

大正七年八月十九日、本校囑託從三位勲二等小島憲之先生薨去せらる。享年六十有二 洵に哀惜に堪へざるなり。先生恭謙謹嚴衆人のために敬畏せられ、本校に在りて用器畫法を教授すること三十年、故に本校より出で、圖畫教員の職に従事せるものは、威な其教を受けざるはなし、先生本校の爲に盡せるの功誠に大なりといふべし。先生は舊幕臣にして安政四年六月十四日に生れ、明治元年四月大學南校に入り、同六年米國に遊學し、八年九月紐育州イサカ府コーネル大學に入りて造家學科を修め、十二年六月卒業して學位を受け、

尋で歐洲を遊歴して歸朝し、十四年十月文部省御用掛となり十五年十二月東京大學教授に任じ、十九年四月二十九日、今の高等學校の前身なる第一高等中學校教諭に任ぜられ、二十一年十月工科大學教授に兼任す。二十二年一月十九日、本校の囑託を受く、之れ本校開校の前月なりとす。されば現今本校に在りて勤績最も古きは、實に先生を推したりしなり。又文部省の教員檢定試驗委員として、毎年先生の名の委員中に列せられざることなし。先生は實に生涯を育英の爲めに捧げたるの人にして、暇餘又弓術を學びて堂に上り、名手を以て稱せられたり。彼を思ひ之を懷ひ叙して之に至れば、先生の溫容彷彿として、目前に在りて耳其教を聞くが如し、筆を抛ち、撫然として追悼の情に堪へざるなり。(大正七年九月廿六日 晁江〔歴代統三〕)

●菅野眞氏逝く 元本校助教授文庫主任菅野眞氏僅かに二日の病氣にて九月十六日遽かに逝去せらる、氏は仙臺の人、第二高等中學校に學びたるも中途退學し郷里に於て中學教員となりて英語及び圖畫を擔任す、後上京して東京外國語學校伊太利語別科に入り修業す、此頃即ち明治三十四年十一月本校に奉職し文庫掛を命ぜられ、課外伊太利語科を擔任し又英語授業補助囑託となり同四十年三月助教授に任じ文庫掛主任を命ぜられ、文展の開設せらるゝに當り同會書記を兼ね、文庫に於て校外の研究者にも圖書閱覽を許すの制を設けたるは氏の在任當時の事にして其他文庫の整備に就て盡力せらるゝ所多かりき、後日英博覽會出品協會の囑を受け渡英するに及び明治四十二年十二月休職となる、日英博覽會後歐洲各國を遍歴して、彼の地都市修飾の狀況を視て感ずる所あり、歸朝後専ら都市修飾に心血を注ぎ各地の都市より招かれて修飾法を説きたりしが未だ志を成さ

ずして忽然逝かれたるは惜むべし。

東京美術學校近事〔二七—五。T・七・十二・三〇〕

●辭令

任東京美術學校助教(十一月二十七日)

雇助手 三浦 柳三郎  
教授 寺崎 廣業

依願免本官(十一月二十九日)

助教授 小林 萬吾

任東京美術學校教授兼東京高等師範學校教授如故

助教授 水谷 鐵也

紋高等官七等

同 松岡 輝夫

囑託 大島 勝次郎

任東京美術學校教授

紋高等官七等(以上十二月十日)

教授 川合 芳三郎

日本畫科主任を命ず(十二月十三日)

吉原 長宗

雇を命ず、教務掛兼庶務掛を命ず(同日)

囑託 矢代 幸雄

任東京美術學校教授兼第一高等學校教授

紋高等官七等(十二月十六日)

陞紋高等官三等

教授 櫻岡 三四郎  
教授 岡田 秀

陞紋高等官四等

同 鎌田 彌壽治

陞紋高等官五等

同 教授 鹿島 英二  
同 結城 貞松

陞紋高等官六等(以上十二月十九日)

●寺崎教授辭職 教授寺崎廣業氏は近頃咽喉部に病症を發し治療せられつゝあるが、當分畫筆をも執らざる程にて學校への出勤は到底不可能なればとて辭表を提出せられしが、十一月二十九日遂に聽許せらる、閑地に就きて徐ろに靜養せらるゝ爲に止むを得ざることゝ

はいへ、日本畫界の重鎮たる同氏の辭任を見たるに至りたるは本校の大損失にして惜みてもなほ餘りあり、今般辭職につき在官中の功績を録し、特旨を以て位一級進められ正五位に陞紋せられたり、亦本校職員並びに日本畫科卒業生有志者より各々記念品を贈呈する由、同氏の略歴左の如し。

慶應二年二月廿五日秋田に生る○初め秋田醫學校に入り二ヶ年にして退學○明治十六年秋田の人狩野派畫家小室秀俊に就き畫法を學ぶ○明治廿一年二月東京に來り平福穂庵に就き四條派を學び德德庵歿後古今大家の法を獨習す○明治二十九年十一月本校圖案科教授囑託○同三十年三月任助教教授○同三十一年四月免官○同三十四

業囑託○同三十一年四月免官○同三十四

業囑託○同三十一年四月免官○同三十四

業囑託○同三十一年四月免官○同三十四

業囑託○同三十一年四月免官○同三十四

業囑託○同三十一年四月免官○同三十四

年九月任教授○同四十年八月美術審査委員を命ぜられ爾來今に至る○四十二年六月清國へ旅行のため休職○同年八月歸朝復職○大正二年十二月日本畫科主任を命ぜらる○同五年七月敍從五位○同六年六月帝室技藝員を命ぜらる○同七年七月敍勲五等授瑞寶章

### ● 陞任教官の略歴

三浦〔柳三郎〕助教 茨城縣の人、號光風、石川光明に牙彫を狩野壽信に畫を學び明治四十年九月本校牙彫部助手に就職せらる

小林〔萬吾〕教授 香川縣の人、明治三十一年本校西洋畫科選科卒業○同卅二年十一月本校助手○同卅七年九月本校助教○同四十四年二月滿三年間佛國伊國獨國へ留學を命ぜらる○大正三年六月歸朝○大正五年三月兼任東京高等師範學校教授

水谷〔鉄也〕教授 長崎縣島原の人、號佳園、初め奈良の彫刻家森川杜園に學び○明治三十五年七月本校彫刻科卒業○同三十六年本校助手○同三十八年十二月助教○同四十三年七月彫塑研究の爲め三年間佛伊獨國留學を命ぜらる○大正二年十二月歸朝松岡〔輝夫〕教授 播磨の人、號映丘、明治三十八年七月本校日本校畫科卒業○同四十一年九月本校助教

大島〔勝次郎〕教授 東京の人、號如雲、夙に祖業を紹ぎ鑄金に従事す、明治二十三年十二月本校雇○同二十四年八月本校技手に任す○同二十六年九月技手廢官により囑託となる、

矢代〔幸雄〕教授 横濱の人、第一高等學校を経て東京帝國大學法科大學商業學科に入り後文科大學英文學科に轉科、大正四年

七月卒業、卒業に際し優等學生として御下賜の銀時計を拜受す○同年九月本校英語、西洋美術史、西洋彫刻史授業囑託○大正六年三月第一高等學校英語授業囑託を兼ね

### 職員 動靜

久米桂一郎氏（教授）電話高輪一五一〇へ變更。

澤村專太郎氏（囑託）北豐島郡高田村鶉山一五〇一へ轉居せらる。

古宇田實氏（教授）十一月依囑託製作事業に關し長野縣へ出張を命ぜらる。

小林龜五郎氏（製版科助手）<sup>〔勸〕</sup>勸務演習召集中のところ十一月三十日召集を解除せらる。

### 生徒 動靜

（今後在學生諸君の重要な動靜を本欄に於て報告すべし）  
笠原千之氏（西二）十二月十二日病死せらる、哀悼に堪へず。

### 関連事項

#### ① 西洋画科の教室制

西洋画科が大正七年九月の新学期より第三、第四年生に教室制を適用したことは「東京美術学校近事」(73頁)の記載どおりであるが、これは大正五年の東京美術学校改革運動における改革派の、教師の個人的薰化に重きを置いた教育法を実施すべしという主張をとり入れたものである。この改革について東西美術出版社『美術新報』第一卷第一号(大正七年十月)には次の記事が載っている。

■東京美術学校洋畫科教室制に變る